

トマトキバガ情報第2号

令和6年7月3日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

次作に向けて、ほ場に入れないよう対策しましょう

1 トマトキバガの愛知県での発生確認経過

愛知県内に設置したフェロモントラップにおいて、令和6年4月24日の本年度初誘殺以降、複数地点で誘殺が続いています。しかし、トマト施設内や施設外の収穫残渣で、本虫の寄生及び被害は確認されておりません。

2 他県での発生状況

本年3月以降、複数県でフェロモントラップでの誘殺やトマト施設内で育苗中の苗等への食害が確認されています。近隣の三重県及び岐阜県においても、フェロモントラップでの誘殺が続いており、特に三重県北勢地域では、6月に入り誘殺数が急増しています。また、両県ではトマト施設内で本虫による食害が確認されています。

3 防除対策

- (1) ほ場内をよく見回り、本虫の発生が疑われる症状を確認したら、速やかに病害虫防除室（下記連絡先）または最寄りの農業改良普及課へ御連絡ください（写真1～4）。
- (2) 疑わしい被害葉及び果実があった場合、ほ場やハウス周辺に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋で一定期間密閉し、寄生した成幼虫を全て死滅させたいので、適切に処分しましょう。
- (3) 作終了時は、コナジラミ類対策を兼ねて一定期間施設を密閉し、害虫を施設外に出さないようにしましょう。
- (4) 露地に置かれた収穫残渣は、本虫の増殖源になり得ます。収穫残渣は土中に深く埋却するなど適切に処分しましょう。
- (5) 施設栽培では、0.4mm目合いの防虫ネットを張ることが推奨されます。ネット等の破れやすき間は補修し、本虫及びコナジラミ類の施設内侵入を防ぎましょう。
- (6) 本虫は苗を食害する恐れがあります。育苗期間中もコナジラミ類と合わせて、両害虫に適用のある薬剤で防除しましょう。最新の農薬登録情報を確認するとともに、薬剤感受性低下を防ぐため、ローテーション散布時は同一系統（IRACコード）の薬剤を連続使用しないよう注意しましょう（表）。

4 連絡先

農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除室
電話 0561-41-9513（ダイヤルイン）



写真1 トマトキバガ成虫（前翅長約5mm）



写真2 トマトキバガ終齢幼虫（体長約8mm）



写真3 トマトキバガによる葉の食痕

茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる。



写真4 トマトキバガによる果実被害

果実表面に数 mm 程度のせん孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じ果実品質が著しく低下する。

写真は全て農林水産省植物防疫所原図

表 トマトキバガに登録のある農薬 令和6年7月3日現在

薬剤名	希釈倍率 または使用量	使用時期	使用回数	適用作物		IRAC コード
				トマト	ミニトマト	
ベリマークSC	薬量 400株当り25ml (灌注) (希釈水量 400株当り10~20L)	育苗期後半~定植当日	1回	○	○	28
プリロッソ粒剤	2g/株 (株元散布)	育苗期後半~定植時	1回	○	○	
プリロッソ粒剤オメガ	2g/株 (株元散布)	育苗期後半~定植時	1回	○	○	
ディアナSC	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	5
ラディアントSC	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	
ダブルシューターSE	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	-, 5
アグリメック	500~1,000倍	収穫前日まで	3回以内	○		
アフーム乳剤	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	○	○	6
エスマルクDF	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○	○	
コテツフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	13
トルネードエースDF	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○		22A
アクセルフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	22B
フェニックス顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	28
ベネビアOD	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	
ヨーバルフロアブル	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	
グレーシア乳剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	30
プレオフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	UN

成分ごとの総使用回数に注意する。

IRAC コードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRAC コードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/mechanism_irac03.pdf を参照する。

薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。